琵琶湖疏水工事写真帖

琵琶湖疏水は、琵琶湖の水を京都盆地に引くことによって、灌漑、舟運、近代産業の用水に役立てようとするものでした。この構想は、江戸時代初期にも計画されましたが、明治維新後、東京遷都により疲弊した京都の街を復興するための近代化事業としてようやく実現に至りました。

第３代京都府知事、北垣国道は、明治 14(1881)年の知事着任直後から疏水計画にとりくみ、工部大学校（現東京大学）の卒業生、田辺朔郎を技師として京都府に採用し、明治 18 年に疏水工事に着手します。当時の我が国の土木技術は未熟で、大工事はすべて外国人技師の手に委ねられていましたが、疏水工事は、日本人だけの手で成し遂げた最初の大土木事業でした。

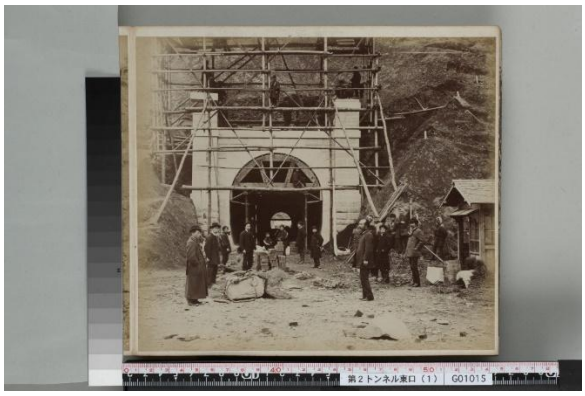
総工費は 125 万円で、その費用には明治初年に下賜された産業基立金や国府補助金等の他、特別に全市民に課税された目的税が充てられましたが、このことからも、疏水工事への市民の期待が伝わってきます。

工事は難工事の連続でしたが、ついに明治 23 年に大津から鴨川合流点まで、同 27 年には、鴨川に沿って伏見に至る鴨川運河が完成しました。
また途中で、当初の予定にはなかった水力発電が疏水利用の主目的に変更され、明治 24 年には日本初の水力発電所である蹴上発電所が運転を開始し、同じく我が国最初の路面電車の開通に大きく貢献しました。

この『琵琶湖疏水工事写真帖』は、疏水工事の様子を、現代にありのままに伝える貴重な資料で、京都府会議員とし

て工事の際に尽力した中村栄助氏が所持していたものを、中村氏の三男の元京都市長高山義三氏が受け継がれ、当館に寄贈されたものです。

なお、この写真帖には、琵琶湖疏水工事の写真以外に、南山城地方と思われる、砂防工事の写真も一部含まれています。



（2015 年 11 月 4 日公開）